

イデックスオイルレポート ~For a week~

株式会社新出光

【概況】

●6日、米労働省がこの日発表した5月の雇用統計(季節調整済み)によると、景気動向を敏感に反映する非農業部門の就業者数は前月比13万9,000人増だった。伸びは4月(14万7,000人増、改定)から幾分鈍化。市場予想(13万人増)と同程度だった。一方、失業率は4.2%で横ばいとなった。米雇用情勢の底堅さが示されたことから買い安心感が広がり、米株式相場が大幅上伸。投資家のリスク回避姿勢が後退し、株式と並ぶリスク資産である原油にも買いが入り相場は**64.58**ドルへ続伸した。

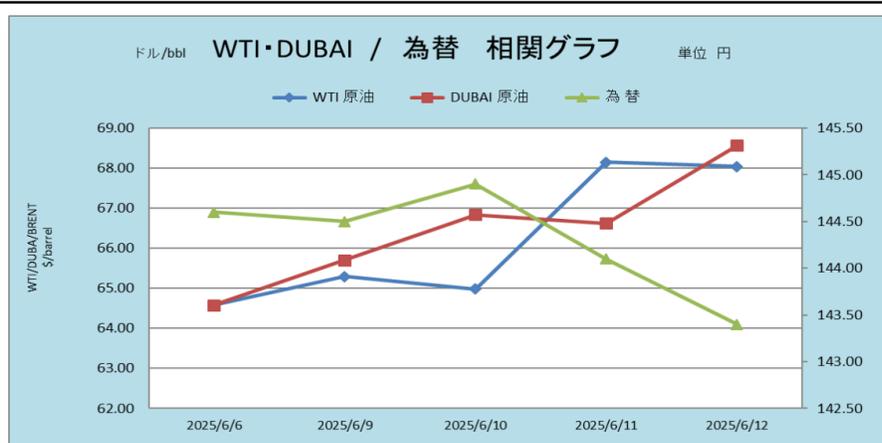
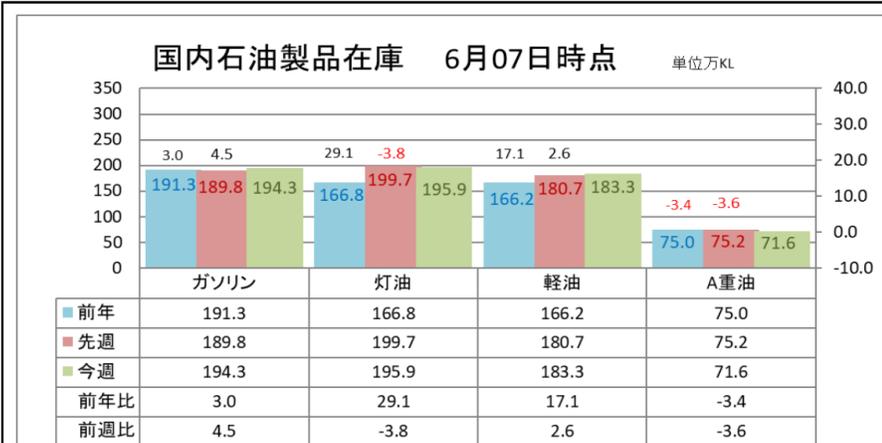
●9日、米中両政府はこの日、ロンドンで約1カ月ぶりに閣僚級の貿易交渉を再開。米メディアによると、協議は10日まで続く見込みとされ、結果に注目が集まる中で、買いがやや優勢となった。今回は関税措置のほか、中国のレアアース(希土類)、米国の半導体の輸出規制の扱いが主要テーマとなる可能性があり、これらの分野で歩み寄りがみられるかどうかの焦点。交渉が進展すれば、エネルギー需要の拡大を後押しするとの思惑から、相場は**65.29**ドルへ続伸した。

●10日、米中両政府は10日、ロンドンで2日目の閣僚級貿易協議に入った。中国のレアアース(希土類)輸出規制を巡る進展の有無が焦点となる中、ラトニック米商務長官は同日、協議は順調に進んでいると発言。協議を通して両国の貿易摩擦が緩和され、エネルギー需要が上向くと連想から、原油は午前にかけては買いが優勢となり、一時66.28ドルまで上伸する場面もあったがあとは利益確定売りが優勢となり相場は4営業日ぶりに**64.98**ドルへ反落した。また、石油輸出国機構(OPEC)盟主サウジアラビアの国営石油会社サウジアラムコが計画している7月の対中輸出が、前月比100万バレル減の約4,700万バレルにとどまる見込みだと一部の報道も下支え要因となった。

●11日、米中両政府は10日まで開かれた貿易協議で、5月にスイス・ジュネーブで行われた閣僚級協議で一致した内容を履行するための「枠組み」設置で合意した。中国によるレアアース(希土類)の輸出規制の解決にもつながるとみられている。滞っていた米中の貿易が改善され、石油需要拡大につながるなどの期待が広がり、原油は取引序盤から買い進まれた。一部報道で、在イラク米大使館が地域的な安全保障上のリスクの高まりを受け、避難命令を出す用意をしていると伝わった。これをきっかけに石油輸出国機構(OPEC)加盟国イラクの供給不安が浮上し、相場は上げ幅を急拡大し**68.15**ドルへ急反発した。

●12日、核開発問題で対立するイランとの協議進展について、トランプ米大統領は11日、米紙とのインタビューで「自信がなくなりつつある」との認識を表明。米国がウラン濃縮活動の停止を求める一方、イランは「平和利用」が目的として譲歩を拒み、双方の主張は平行線をたどっている。こうした中、イスラエルが敵対するイランへの攻撃準備を完了したと通告したことで、米政権は隣国イラクの大使館職員に避難指示を出したほか、国民に渡航中止を勧告するなどの対応に追われ、相場は11日夕に一時69.30ドル付近まで上昇した。しかし、米国とイランの第6回高官協議を15日に控え、石油供給網の混乱を警戒した買いはいったん収束。買われ過ぎとの見方が台頭し相場は**68.04**ドルへ小反落した。

6月13日 16:00現在 WTI原油 72.48ドル 為替 1ドル 144.08円



次回元売変動予測

	6/19~	元売変動予測
ガソリン	→	+4.5~+5.0
灯油	→	+4.5~+5.0
軽油	→	+4.5~+5.0
A重油	→	+4.5~+5.0
L S A	→	+4.5~+5.0

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「0.5円」、補助金は、「ガソリン・灯油@10.0円・軽油・A重油@5.0円」、都合「ガソリン・軽油 ▲0.1円・軽油 A重油+0.5」の改定となった。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの9日時点の小売価格平均は172.2円となった。

《6月19日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「4.5円~5.0円」、激変緩和補助金は「10.0円」の見込みで、都合「4.5円~5.0円」の改定予測となっている。

※原油コスト「4.5円~5.0円」
 ※激変緩和補助金(ガソリン・軽油)「10.0円」前週比±0円
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】 < INPEX、水素・アンモニア製造装置を試運転 ガス原料に >

INPEXは6日、新潟県柏崎市で水素やアンモニアを製造する装置の試運転を始めたと発表した。天然ガスを原料とし、製造した水素は発電に使うほか一部をアンモニアに加工して現地企業に供給する計画で、二酸化炭素(CO2)の回収・利用・貯留(CCUS)技術も組み合わせる。次世代燃料の普及に備えて知見を蓄積する。

2日装置に天然ガスを入れて、一部で試験稼働した。製造装置の試運転などを経て、秋ごろに水素の本格生産に着手する予定だ。本格稼働した際の水素の生産量は年間700トンを見込む。装置では、INPEXの新潟県の新潟田から出た天然ガスを使い、水素を製造する。水素は製造装置の敷地内にある発電設備で活用し、柏崎市内に電気を供給するほか、一部は窒素を加えてアンモニアにして県内の需要家に販売する。製造過程で出るCO2は生産を終えた旧ガス田に貯留することで環境負荷を抑える。水素やアンモニアは燃やしてもCO2を出さないため、産業や輸送向けなどの次世代燃料として期待されている。INPEXは23年7月に設備の工事を始めていた。